



医師・診療放射線技師のための 症例に学ぶ 胃がん X 線検診読影講座 読影基準とカテゴリー分類を中心に

細井董三，入口陽介，小田丈二，
茨城県総合健診協会 編



胃のバリウム検査を実際に行っていて、参考になる良書の数はとても多く、どれを選んだら良いのか迷うほどである。一方で撮影者のレベルによってはやさしすぎたり、難しすぎたりと一生傍らに置いておきたい本に出会うまでに時間が掛かる

のも事実である。特に診療放射線技師が自ら撮影を行い、読影の補助までを行っている現在においては、他者に自信を持って薦めることができる書を持っていることは幸せなことである。

“Ⅰ 総論”では、胃がん X 線検診を行う医師、診療放射線技師には必ず知っておかなければならない撮影、読影についての知識が丁寧にまた分かりやすくまとめられている。つまり、標準撮影法からカテゴリー分類までを実際の X 線写真を使ってとても分かりやすく、またカラー内視鏡検査写真と病理組織学的所見とを一緒に見比べることができるようになっていいる。数々の胃がん X 線検診に携わっている医師、診療放射線技師においても、この総論はいつでも読み返して自分の知識・技術の再確認ができる大変有意義な章である。

いよいよ、“Ⅱ 症例から学ぶ読影のポイント”では初級編 9 症例，中級編 9 症例，上級編 12 症例，応用編 12 症例の 4 段階に分けられ、非常に豊富な症例が示されている。初級編，中級編，上級編には必ずカラー内視鏡検査写真と病理組織学的所見が付

随しており読影を助けてくれるが、初めは内視鏡写真を見ずに X 線写真のみで読影するのも実力を確かめるには良い方法であろう。そして最後の応用編では逐年検診を受けていて、所見は示されていたにもかかわらず、前年度は未チェックで当年度初めてチェックされた症例が 12 例列挙されている。本書以外ではこのような症例を取り上げている書は皆無と言える。正に、応用編では自分の培ってきた実力を試すことができると言って良いだろう。

初級編から応用編まで全 42 症例には全て“読影のポイント”の記載があり、それぞれの症例について、“Ⅰ 総論”と同様に丁寧にかつ分かりやすくまとめられおり、もし仮にこの“読影のポイント”をこれから胃のバリウム検査に携わろうと考えている初学者が読み進めていくと、自分が全てを知り尽くしたスペシャリストになったかのような錯覚に陥ってもおかしくない。それほど本書はしっかりとしたプロセスで構成されており、著者の先生方の豊富な経験と確かな技術力、診断力の証明とも言える。

また、実際に撮影を行っている診療放射線技師と読影医が、目の前の症例について本書を開きながら議論している姿も容易に想像できる。読影医からは「このような症例の場合は、本書のこの写真のように撮影して欲しい」、若しくは撮影する診療放射線技師からは、「このような症例が疑われたので、本書のこのような撮影を追加した」と、さながら本書を共通言語として使用するかの如く議論している姿である。

最終ページの“まとめ”では、著者の先生方が、胃がん X 線検診の精度向上に重要と思われる、読影面 11 事項，撮影面 10 事項の要点が記されており、撮影、読影に携わる全ての医師、診療放射線技師に向けてのメッセージとして受け取ることができる。正に本書で伝えたいことの集大成で、日頃の撮影、読影が忙しくても、定期的に目を通したいページである。何度も本書を読んでいるが、いつも最終ページを読み終えた後は、あたかも一遍の物語を読み終えた時と同じ感覚がある。そして、今回もそれを感じながら最終ページを閉じることにする。

(田野政勝 虎の門病院放射線部)
(ISBN978-4-86003-448-1, A 4 判 128 頁，定価本体 3,800 円，医療科学社，☎ 03-3818-9821，2014 年)